

Divyāvadāna が強調する業の側面とその背景

平岡 聡*

An Aspect of Karma Emphasized in the *Divyāvadāna* and its Background

Satoshi Hiraoka

0. はじめに

「ジャータカ」は発生的には様々な問題を含んではいるものの、現存のパーリ・ジャータカはその形式においても内容においても一定のスタイルを備えており、適切な定義を与えることに多言を要しない。即ち「形式的には、現在物語→過去物語→連結という三部から構成されており、内容的には仏陀の前生を扱う物語である」と言えば、ほぼ総てのパーリ・ジャータカに該当する定義となる。しかしこれが「アヴァダーナ」の定義となると、事態は一変する。これまで様々な定義がなされてきたが、どれも満足のいくものではない⁽¹⁾。

アヴァダーナは、その形式的な面を取り上げれば、ジャータカと同じように、「現在物語→過去物語→連結」という構成を持つものが多いが、中には「現在物語」のみに終始するものもある⁽²⁾。またその内容に目を向ければ、アヴァダーナは仏弟子や仏教の在家信者の物語を扱い、彼らがジャータカにおける仏陀の役割を果たしているものも多いが、しかし依然として話の主人公は仏陀であり、形式的にも内容的にも全くジャータカと変わらないものがアヴァダーナと呼ばれているものもあって⁽³⁾、その定義は困難を極める。

アヴァダーナと呼ばれる一連の説話は実に複雑多義に亘り、従ってアヴァダーナと呼ばれている説話総てに共通する「アヴァダーナ性」を見つけ出すことは容易ではない。いかなる仏典も様々な要素が渾然一体となっているために、そのどれか一つの要素のみを捕らえて、その仏典を完全に理解することは不可能であるが、しかし少なくともアヴァダーナの主題の一つが「業報思想」にあることは、その説話に目を通せば、否定できない事実として浮かび上がってくるであろう。

一口に業と言っても様々な側面があるが、本稿においてはアヴァダーナ文献の一つである『ディヴィヤ・アヴァダーナ』(Divyāvadāna, Divy.)を資料として取り上げ、そこに見られる主人公の過去物語を中心にして、多面性を持つ業の、いかなる側面がDivy.で強調されているか、またそれが何を意味するのかについて考えてみたい。

1. Divy.の定型句で強調される業の二側面

Divy.は38篇の説話から構成されており、その形式は既に指摘したように一定ではないが、その基本的な形式はジャータカのように「現在

* インド仏教

物語→過去物語→連結」という三部から構成されている。但しその主人公が仏陀ではなく、仏弟子もしくは仏教の在家信者である点は異なっているが、その主人公の過去物語を説明する前に、仏陀によって次のような定型句が説かれることになっている。Divy.第2章「プールナ・アヴァダーナ」における用例を示すと、次のようになっている。

比丘達よ、比丘プールナによってなされ積み上げられた業は、資糧を獲得して、機縁が熟すと、暴流の如く押し寄せてきて必ず実を結ぶのである。プールナによってなされ積み上げられた業を他の誰が享受するというのだ。比丘達よ、〔一旦〕なされ積み上げられた業は、外なる地界において熟するのではない。また水界・火界・風界において熟するのではない。そうではなく、〔一旦〕なされ積み上げられた業は、浄〔業〕であれ不浄〔業〕であれ、感覚のある〔五〕蘊・〔十二〕処・〔十八〕界の中においてのみ熟するのである。たとえ百劫を経ても、業が減することはない。機縁と時とを得て、肉体を有する者達に必ず結果をもたらす。

(Divy. 54.1-10)⁽⁴⁾

そしてある主人公の過去物語を説き終わった仏陀は、連結で次のような定型句を説くことになっているが、これも Divy.第2章「プールナ・アヴァダーナ」における用例を示すと、以下の如くである。

実に比丘達よ、完全に黒い業の異熟は完全に黒く、完全に白い業の異熟は完全に白く、〔黒白〕斑の〔業の異熟〕は〔黒白〕斑である。それ故に、ここで比丘達よ、〔お前達は〕

完全に黒い業と〔黒白〕斑の〔業〕とを捨て去って、完全に白い業のみを心掛けるべきである。されば比丘達よ、このようにお前達は学び知るべきである。(Divy. 55.9-13)⁽⁵⁾

以上の用例から、Divy.が強調する業の側面は次の二点であることが分かる。

- ①業は必ずそれに見合った果報をその作者にもたらし、その果報をもたらすまでは途中で消滅しない⁽⁶⁾。
- ②黒業と白業とは、相殺する関係、あるいは引き算で計算できる関係にはない。即ち、質量3の黒業と質量2の白業とをなした者は、質量1の黒業の果報のみを享受するのではないということである。その作者は質量3の黒業と質量2の白業の果報を両方ともに享受しなければならない。これが「〔黒白〕斑(vyatimīśra)業の意味するところであり、従って「斑(vyatimīśra)」は白と黒とが混ざり合った「灰色」を意味するのではないということである⁽⁷⁾。これに関しては、以下の考察を進めていく中で自ずと明らかになるであろう。

以下の考察ではこのうちの②〔白黒〕斑業に焦点を当てて、その内容を吟味していくことにする。

2. 俱舍論の説く黒白業

善悪業を黒白という色に喩えて、業を、黒業、白業、黒白業、非黒非白業という四種類に分類する仕方は既に初期經典にその萌芽が見られるが、これが有部系の論書である『集異門足論』⁽⁸⁾や『大毘婆沙論』⁽⁹⁾、さらにはこれらの論書を

受け、俱舎論で取り上げられて議論されている。

ところで Divy. に見られる説話は、その半分に相当する 19 話が根本説一切有部毘奈耶 (Vinaya of the Mūlasarvāstivādins) から採択されていると考えられるので⁽¹⁰⁾、ここでは Divy. の説話に見られる黒白業の用例を検討する前に、有部系の論書である俱舎論においてこの黒白業がどのように定義され、また体系づけられているかを概観しておきたい。

俱舎論において黒白業が問題とされるのは、言うまでもなく第 4 章「業品」であり、ここで業が黒白という観点から四種類に分類されている。

また黒白等の区別によって、業は四種類である。

黒なる業で黒なる異熟を有するものもあり、白なる業で白なる異熟を有するものもあり、黒白なる業で黒白なる異熟を有するものもあり、非黒非白なる業で異熟がなく、業の減尽のために働く業もある、と。そのうち、

不善なる〔業〕と、色〔界〕と欲〔界〕で獲得される善なる〔業〕とが、ちょうど順序に従って、黒〔業〕と白〔業〕と黒白両方の業であり、それら〔の業〕を減尽するための無漏〔業〕とである。(AKBh 234. 26-235.5)

ここでは、Divy. に見られる「斑 (vyatimīśra)」という用語は使用されていないけれども、これに相当する語は「黒白 (kṛṣṇaśukla)」と考えてよからう⁽¹¹⁾。さてこれによると、今問題としている黒白業とは「欲界で獲得される善業」を意味し、また黒白なる異熟を有するものとされている。この後引き続いて俱舎論では黒白業を次のように説明している。

欲界繫の善業は黒白である。不善が混じっているからであり、黒白の異熟を有するものである。〔好ましくない〕異熟が混じっているからである。これは〔有情の生涯に亘る〕相続に関して立てられたのであって、自性という点からではない。何故ならば、一つの業、あるいは〔一つの〕異熟があつて、それが黒でもあり白でもあるような、そのような種類に属するものではないからである。【問】また不善の業についても、同じように善が混じっていれば、黒白であるということになるではないか。【答】不善は必ずしも善と混ざるとは限らない。欲界においては、それ(不善)は力が強いから。一方、善は〔不善と〕混ざる。力が弱いからである、と。

ここで大切なのは、黒白業といっても、業の「自性」という点から一つの業や一つの異熟に「黒白」という二つの矛盾した自性が存在するというのではなく、個体の相続に関して黒白がある、つまり有情の身体に、彼が過去になした黒業と白業の異熟が時間を異にしてそれぞれ別々に顕現してくることを指摘している点にある。これはヤショーミトラの注釈では次のように説明されている。

「これは〔有情の生涯に亘る〕相続に関して立てられた」とは、一つの相続において、善〔業の異熟〕と不善〔業の異熟〕とが〔別々に〕現行するから、善が不善と混じるのである。互いに矛盾するからである。善は不善と、不善は善と矛盾するから、〔同一なるものに〕二つの体性があることは理に叶っていない (AKV 397.31-398.1)。

これからも明らかなように、「黒白業」という

場合、それは一つの業が善・不善、あるいは一つの異熟が苦・楽という二つの異なった性質を自性として持っているというのではなく、有情の身心の相続 (saṃtāna) に、黒業の異熟としての苦果と白業の異熟としての楽果とが別々に現れ出てくるという意味において「黒白業」と定義されているのが理解されよう。この「黒白業の異熟がそれぞれ別個に現れ出てくる」というのが、先程指摘した「黒業と白業とは互いに相殺しない」ことの意味内容である。

ではこの黒白業の性質というものが実際の Divy. の説話、特に主人公の過去物語において、どのように反映され、どのように説かれているかを見ていくことにしよう。

3. Divy. に説かれる黒白業とその果報

Divy. の説話に登場する主人公は、現世で苦果と楽果とを共に経験し、多くの場合は最後に阿羅漢となるのであるが、主人公が阿羅漢になった直後、比丘達はその主人公が過去世において積んだ業に疑問を抱いて、「世尊よ、誰某はいかなる業をなしたがために各々然々の苦果を経験し、またいかなる業をなしたがために各々然々の楽果を享受したのですか」と仏陀に質問するところが、過去物語の導入となる。このような質問を受けて、仏陀は、1. で挙げた最初の定型句を述べた後、主人公の過去物語を説明し、その説明が終わると、これも同じ所で挙げた「黒業、白業、黒白業」の定型句を説くという運びになっている。それでは Divy. に見られる各説話の主人公、及び脇役を演じている登場人物も含めて、彼らが過去世でなした黒業と白業、並びにそれがもたらす苦果と楽果とを纏めてみよう⁽¹²⁾。

【第1章】シュローナコーティーカーナ長者
(Divy. 23.21-24.6)

黒業：母親に暴言を吐く (現世)⁽¹³⁾。

苦果：餓鬼の世界をさまよい、悪趣を見る。

白業：塔供養をする。

楽果：広大な資産と巨額の財産を有する裕福な家に生まれる (それが縁となり、出家して阿羅漢となる)。

【第2章】プーラナ長者 (Divy. 54.11-55.9)

黒業：侍僧に暴言を吐く。

苦果：五百生もの間、奴隷女の胎内に生まれる。

白業：執事として僧伽に奉仕する。

楽果：広大な資産と巨額の財産を有する裕福な家に生まれる (それが縁となり、出家して阿羅漢となる)。

【第11章】牛 (Divy. 141.16-142.2)

黒業：悪党であった彼は比丘達の命を奪う。

苦果：九十一劫もの間、悪趣に生まれ、大抵は地獄や畜生界に再生し、常に刃物で殺される。

白業：仏陀に浄心を抱く (現世)⁽¹⁴⁾。

楽果：天界と人界との楽を享受した後、独覚となる (来世)。

【第13章】スヴァーガタ長者 (Divy. 192.17-24)

黒業：独覚に対し悪事を働く。

苦果：五百生もの間、物乞いとして生まれる。

白業：それを反省して、独覚を供養すると誓願する。

楽果：広大な資産と巨額の財産を有する裕福な家に生まれる (それが縁となり、出家して阿羅漢となる)。

【第19章】ジョーティシュカ長者 (Divy. 289.10-18)

黒業：真理を洞察したバンドゥマト王に暴言を吐く。

苦果：五百生もの間、胎内にいる時、母親と共に薪の上に載せられて焼かれる。

白業：ヴィパッシン正等覚者を供養した後、誓願する。

楽果：広大な資産と巨額の財産を有する裕福な家に生まれる（それが縁となり、出家して阿羅漢となる）。

【第21章】サハソードガタ長者 (Divy. 313.26-314.2)

黒業：独覚に暴言を吐く。

苦果：五百生もの間、日雇いの身として生まれる。

白業：それを反省して、独覚に浄信を生じると、誓願する。

楽果：突如として財産を築き、真理を知見する。

【第27章】クナーラ (Divy. 418.7-419.9)

黒業：かつて猟師であった時、五百匹の鹿の眼を潰す。

苦果：五百生もの間、眼を抉り取られる。

白業：壊れていた正等覚者クラクッチャンダの塔を修復して誓願する。

楽果：高貴な家に生まれ、その容姿は美しく、真理を知見する。

【第28章】ヴィータショーカ (Divy. 428.19-429.4)

黒業：独覚を刀で切り殺す。

苦果：数千年という長きにわたり、地獄で苦しみを受け、今生においても、その業がまだ残っていたために、阿羅漢になりながらも刀で切り殺される。

白業：正等覚者カーシャパの時、比丘となって、気前のよい施主に僧伽への食事の供養をさせたり、また塔供養をする。さらに彼は一万年の間、梵行を修行し正しい誓願を立てる。

楽果：高貴な家に生まる（それが縁となり、出

家して阿羅漢となる）。

【第31章】五百人の百姓 (Divy. 464.14-20)

黒業：比丘であった彼らは經典を読誦せず、暗誦せず、作意に励むこともなく、そのくせ施物は享受し、怠惰に時を過ごす。

苦果：五百生もの間、百姓となる。

白業：正等覚者カーシャパのもとで出家し、梵行を積む。

楽果：仏陀の教えに従って出家する（それが縁となり、阿羅漢となる）。

【第31章】牛 (Divy. 465.2-7)

黒業：比丘であった彼らはほんの少しの学処も守らなかった。

苦果：牛として生まれる。

白業：正等覚者カーシャパのもとで梵行を修し（過去世）、仏陀に対して浄信を抱く（現世）。

楽果：真理を知見して天界に生まれる。

【第36章】シャーマーヴァティー (Divy. 583.14-539.12)

黒業：ブラフマダッタの後宮だった彼女は独覚の庵を焼いて面白がる。

苦果：長年の間、地獄で焼かれ、今生でも火で焼かれる。

白業：その後、独覚の現じた奇瑞を見て改心し、彼を供養して誓願を立てる。

楽果：真理を知見して、焼け死んだ後は天界に生まれる。

【第36章】クブジョーッターラ (Divy. 540.1-9, 540.24-541.1, 541.5-6)

黒業：独覚のことを嘲笑し、また彼女の侍者を奴隷呼ばわりする。

苦果：亀背として生まれ、女奴隷となる。

白業：独覚を供養し、誓願を立てる。

楽果：一度耳にしたことは忘れない。

【第37章】ルドラーヤナ王 (Divy. 582.6-584.4)

黒業：獵師だった彼は独覚の急所を矢で射抜いてしまう。

苦果：何百年何千年もの間、地獄で煮られ、また今生においても、その業の残余のために、阿羅漢となりながら、刀で切り殺される。

白業：矢で射抜かれた独覚が現じた奇瑞を見て獵師は改心し、入滅したその独覚の遺体を荼毘に付し、手厚く供養すると、舍利塔を建立して誓願する。

楽果：広大な資産と巨額の財産を有する裕福な家に生まれる（それが縁となり、出家して阿羅漢となる）。

以上、Divy.の説話に見られる登場人物の過去物語を中心に、彼らがなした黒業と白業、並びにそれがもたらす苦果と楽果とを纏めてみたが、これらの結果からも、「黒業の果報は黒業の果報として、また白業の果報は白業の果報として、それぞれ別々に享受しなければならない」、あるいは「黒業と白業とは相殺しない」という業説を見事に反映する形で説話が構成されているのが分かる。

4. シュローナの餓鬼界遍歴物語に見る黒白業

3.では主人公の過去物語を中心に「黒白業」の実際の用例を見てきたが、この業説をより明確な形で端的に説話化したのが、第1章「シュローナコーティーカルナ・アヴァダーナ」に見られる餓鬼界遍歴の物語である⁽¹⁵⁾。主人公のシュローナは航海に出掛ける前、自分の母親に暴言を吐いたために、餓鬼の世界を遍歴する羽目になるのだが、そこで彼は様々な餓鬼に出逢い、彼らが享受する業の果報を目の当たりして

いる。以下、この話を紹介しよう。

彼が餓鬼の世界をさまよっていると、日が沈む頃、ある宮殿にやってくる。そこでは、ある男が夜には四人の天女達と遊び戯れているかと思えば、太陽が昇って昼になると、その宮殿と天女達とは忽然と姿を消し、それに代わって黒い斑点のある四匹の犬が現れ、その男をうつ伏せにすると、太陽が沈むまでその男の背肉を貪り食べているのを目撃する。そして太陽が沈むと再び宮殿と天女達が現れ、その男は以前と同じように彼女達と遊び戯れるのである。そこで疑問を抱いたシュローナはその男に、生前どのような業を積んだのか尋ねると、その男は次のように答えるのである。

「シュローナよ、私はヴァーサヴァ村で羊飼いをしていた。羊達を次から次へと殺し、〔その〕肉を売っては生計を立てていたのだ。すると聖者マハーカーティヤヤナが私を憐れんでやって来られ、『君、その業の果が熟することは望ましくない。君はこの罪深き非行を止めなさい』と言われたのだが、私は〔聖者〕の言葉〔を聞き〕ても〔その非行を〕止めなかった。〔その後も聖者〕は『君、その業の果が熟することは望ましくない。あなたはこの罪深き非行を止めなさい』と〔言って〕何度も何度も私を説得されたのだが、それでも私は止めなかった。〔そこで聖者〕は私に『君、君はこれらの羊を昼間に殺すのかね、それとも夜にかね』と尋ねられたので、私は『聖者よ、昼間に殺すのです』と答えた。〔すると聖者〕は、『君、〔それなら〕夜間〔だけでも〕戒を守ったらどうかね』と言われたので、私は〔聖者〕のもとで〔戒を授かり〕夜間〔だけ〕戒を守ったのである。夜間に戒を守ったという業の異熟として、夜には

このような天界の快樂を享受するのであるが、
昼間、私が羊を殺した業の異熟として、昼には
このような苦しみを受けるんだ」

そして彼は詩頌を唱えた。

「昼には他の命を奪い、夜には〔持〕戒の
徳を具えたが、その業果として、実にこ
のような快樂と苦しみとを〔交互に〕享受
する」 (Divy. 10.1-18)

この後、シュローナは再び餓鬼界をさまよひ、
太陽が昇る頃に別の宮殿に到着する。そこでも、
ある男が艶やかな天女と太陽が沈むまで遊び戯
れていたが、一旦太陽が沈んでしまうと、その
宮殿と天女とは突然姿を消し、代わって強大な
百足が出現するや、その男の体を七重に巻き付
け、日の出時まで男の頭を貪り食っているのを
目撃する。太陽が昇ると、その百足は姿を消し、
再び宮殿と天女とが現れて、男は彼女と遊び戯
れていた。その男に対してもシュローナが前と
同じ質問をすると、男は次のように答えるので
ある。

「私はヴァーサヴァ村でバラモンをしていた
が、人妻と浮気をしていた。すると、聖者マ
ハーカーティヤナが私を憐れんでやって
来られ、『君、その業の果が熟することは望
ましくない。君はこの罪深き非行を止めなさい』
と言われたのだが、私は〔聖者〕の言葉
〔を聞い〕ても〔その非行を〕止めなかった。
〔その後も聖者〕は何度も何度も私を説得さ
れたのだが、依然として私はその罪深い非行
を止めなかった。〔そこで聖者〕は私に『君、
君は人妻と昼間に浮気をしているのかね。そ
れとも夜にかね』と尋ねられたので、私は
『聖者よ、夜にです』と〔聖者〕に答えた。
〔すると聖者〕は、『君、〔それなら〕昼間

〔だけでも〕戒を守ったらどうかね』と言わ
たので、私は〔聖者〕のもとで〔戒を授かり〕
昼間〔だけ〕戒を守ったのである。私は聖者
カーティヤナのもとで〔戒を授かり〕、
昼間に戒を守ったというこの業の異熟として、
昼間にはこのような天界の快樂を享受するの
であるが、夜間、私が人妻と浮気した業の異
熟として、夜にはこのような苦しみを受ける
のだ」

そして彼は詩頌を唱えた。

「夜は人妻にうつつをぬかし、昼は〔持〕
戒の徳を具えたり。その業果として、実に
このような快樂と苦しみを〔交互に〕享受
する」 (Divy. 11.20-12.4)

ここでは、先の例とは逆の展開になっているが、
その意図するところは同じである。この二つの
用例が如実に描き出しているように、前世でな
した「黒業→白業→黒業→白業」の果報が、こ
れに対応する形で現世に「苦果→楽果→苦果→
楽果」となって現れ出ている。前者の例で言え
ば、夜に戒を保ったという白業のために、餓鬼
界においては夜に四人の天女達と戯れるという
楽果があり、また昼には羊を殺したという黒業
のために、餓鬼界においては犬に貪り食われる
という苦果を享受せねばならないようになって
おり、これがその業の尽きるまで交互に繰り返
されることになるのである。

このように黒業と苦果、白業と楽果との間には
厳密な「一対一の対応関係」が認められ、決
して黒業と白業とが相殺することなく、その果
報としての苦果と楽果とがそれぞれ別個に一人
の有情に現行しているのが理解されよう。一旦、
業をなした者は、それが善であれ悪であれ、必
ず両方の果報をそれぞれ別々に享受しなければ
ならないようになっており、Divy.の説く黒白

業は、このシュローナの餓鬼界遍歴の説話に凝縮される形で描かれていると言えよう。

このような用例を見る時、俱舎論で説かれていた「これ（黒白業）は〔有情の生涯に亘る〕相続に関して立てられたのであり、自性としてではない」という文言、またこの箇所がヤショミトラによって「一つの相続において、善〔業の異熟〕と不善〔業の異熟〕とが〔別々に〕現行するから、善が不善と混じるのである」と注釈されている部分がよく理解されるであろう。

5. 小結 — 黒白業の背景 —

以上、俱舎論に説かれている黒白業の定義や内容を概観した後、その黒白業が Divy. の説話の中で実際にどのように説かれているかを見てきた。特にここでは主人公の過去物語で説かれる黒白業の内容を見てきたわけだが、面白いことに Divy. に見られる過去物語では、その登場人物が黒業と白業とを共に積み、その果報を両方ともに享受するというのが圧倒的に多く、黒業のみを積んで苦果を、また白業のみを積んで楽果を享受するという説話は極めて少ないのである⁽¹⁶⁾。このような事実から考えられることは、Divy. の主題の一つがこの黒白業を強調することにあつたのではないかということである。でなければ、Divy. において「黒業→苦果」や「白業→楽果」のみを内容とする説話がこれ程までに少ないという事実は説明できないように思われる。

では「どうして黒業や白業ではなく、黒白業を強調しなければならなかったか」ということが問題になろう。そこでもう一度、黒白業の特徴に注目してみよう。黒白業で強調されていたのは、すでに指摘したように、黒業と白業とが相殺する関係にないという点であつた。換言す

れば、両者は引き算の関係にはないということであり、実際にこの考え方が Divy. の説話に見事に反映されているのは既に指摘したとおりであるが、これはいかなる黒業も認めないというところに重要性がある。もしも両者が相殺されてしまえば、たとえ黒業を積んだとしても、それをカバーするだけの白業を積み、その黒業は帳消しにされ、清算されてしまうことになろう。ということは黒業を積んでも構わないことになり、結果として黒業を認めることになってしまう。ところが両者は引き算される関係ではないとしたら、少しの黒業を積んだ後にいくら多くの白業を積んだとしても、その黒業は消えず、黒業の果報は苦果として、白業の果報は楽果として、それぞれ別個に享受しなければならないことになるから、「勸善懲惡」の立場よりすれば、こちらの方が業報説話として効力を持つことは明白であろう。「黒業を積んだために苦果を味わう」、「白業を積んだために楽果を享受する」というだけでは極めて常識的な論理であり、これを強調するために敢えて説話を作る必要はないし、また仮に作ったとしてもそのような説話は興味あるものとはならなかったであろう。またはそのような説話が作られてはいたが、時を経るに従って淘汰され、生き残れなかったとも考えられるのである。従って、黒業のみや白業のみの説話はそれほど重要ではないのである。重要なのは「黒業と白業の両方を積んだ場合、その果報はどうなるのか」ということである。当時の仏教徒の関心も当然この点に収束していったのではないだろうか。だからこそ黒白業に関する説話が多く作り出され、黒業を犯してはならないことを教えるためには、黒業と白業とが相殺しないことを強調する必要があり、そのためには黒業や白業ではなく、黒白業が重要なテーマとして取り上げられたので

あろう。両者が相殺する関係にない以上、黒業は勿論のこと、黒白業も捨て去らねばならないのである。このように理解すれば、1.で指摘した「完全に黒い業と〔黒白〕斑の〔業〕とを捨て去って、完全に白い業においてのみ心に向けるべきである」という定型句が物語の締め括りとして最後に置かれているのも納得がいくのである。

では更にどうしてこれほどまでに「黒業と白業とが相殺しない」ことを強調する必要があったのかが問題になる。これは、換言すれば「このような黒白業を主題とする業報説話が多く作り出されるようになった背景は何か」という問題である。これに関して平川彰は「これは時代を経るにしたがって律の規範が乱れてきたことと併せて考える必要があろう。原始教団の初期においては戒律の規則は『仏陀の制定した規則であるから破ってはならない』ということだけで充分にその権威を承認せられていた。しかし後世になると律儀は次第に乱れてきたために、業報の譬喩によって戒律の客観性を基礎づけたのであると考えられる(趣意)」⁽¹⁷⁾と指摘している。もしもそれが史実だとしたら、根本説一切有部律や、そこから説話を借用したと考えられる Divy. 等の業報説話が作り出されていった背景には、それだけ深刻な戒律の乱れがあったと考えられるのである。ではそれが時代的にいつ頃であったか、ということに関しては各説話の発展段階を明らかにすることにより、ある程度の年代設定が出来ると思うが、この問題は今後の課題としておきたい。

《略号》

AKBh : Abhidharmakośabhāṣya, edited by Prahad Pradhan, Patna, 1967.

AKV : Abhidharmakośavākyā, edited by Unrai

Wogihara, Tokyo, 1932-1936.

Divy. : Divyāvādāna, edited by E. B. Cowell and R. A. Neil, Cambridge, 1886.

《注》

- (1) 「アヴァダーナ」の定義付けに関する従来の研究の成果を纏めて紹介したものと以下のものが挙げられる。S. Sharma, *Buddhist Avadānas - Socio-political economic and cultural study*, Delhi : Eastern Book Linkers, 1985, 3-7 ; 杉本卓洲『新国訳大蔵経 撰集百縁経(本縁部2)』東京 : 大蔵出版, 1993, 12-22 ; 松村恒「聖典分類形式としてのアヴァダーナの語義」『今西順吉教授還暦記念論集 インド思想と仏教文化』東京 : 春秋社, 1996, 692 (257)-662 (287) .
- (2) Divy. 第6章「インドラナーマブラーフマナ・アヴァダーナ」、第14章「スーカリカ・アヴァダーナ」、第29章「アショーカー・アヴァダーナ」など。
- (3) Divy. 第5章「ストゥティブラーフマナ・アヴァダーナ」、第8章「スプリヤ・アヴァダーナ」、第17章「マーンダータ・アヴァダーナ」、第20章「カナカヴァルナ・アヴァダーナ」、第22章「チャンドラブラバボーディサットヴァチャルヤ・アヴァダーナ」、第30章「スダナクマラー・アヴァダーナ」、第32章「ルーパーヴァティー・アヴァダーナ」、第33章「シャールドウーラカルナ・アヴァダーナ」など。
- (4) Cf. Divy. 131.7ff, 191.11ff, 282.10ff, 311.14ff, 464.11ff, 504.19ff, 532.23ff, 538.11ff, 539.28ff, 541.9ff, 581.26ff, 584.13ff
- (5) Cf. Divy. 23.27ff, 135.21ff, 193.12ff, 289.20ff, 314.4ff, 348.2ff, 586.3ff.
- (6) この他にも、Divy. では「業の必然性・不可避性」を強調する偈頌が存在する。

前世でなされた〔業〕は、善であれ不善であれ、消

滅することはない。尊師達に対する奉仕〔も〕消滅することはない。聖者達に対して語ったこと〔も〕消滅することはない。恩を知る人に対してなしたこと〔も〕決して消滅することはない。善くなされた業は美しく、或いはまた悪くなされた〔業〕は醜い。そしてそ〔の業〕は成熟し、必ず果報をもたらすであろう (298.13-18)。

王よ、過ぎたことを嘆くな。あなたは牟尼の言葉を聞かなかつたのか。即ち、「かの勝者達でさえ、実に堅固な業より免れず、独覚達も全く同じなり」(416.10-13)

過去において繰り返しなされた〔業〕は、善であれ不善であれ、消滅しない。〔業〕は賢者においても消滅しないし、聖者の集団においても滅することは無い。善不善を問わず、〔一旦〕なされた〔業〕は恩を知る人達においても消滅しない。善くなされた業は美しく、そしてまた悪くなされた〔業〕は醜い。〔その〕両方の〔業〕は成熟し、必ず果報をもたらすであろう (481.16-20)。

大氣中にも、海の中にも、〔また〕山々の洞窟に入ってみても、業の力が及ばない場所は何処にも存在しない、と (532.27-29, 561.5-7)。

業は遠くで〔も人を〕引き寄せる。業は遠くから〔でも人を〕引き寄せる。業は〔その果報が〕熟するところに人を引き寄せるのである (566.6-7)。

(7) 今ここに挙げた二つの業観が原則であるが、但し例外的にこの原則から外れるような用例も Divy. に僅かに存在する。平岡聡「『ディヴィヤ・アヴァダーナ』に見られる業の消滅」『佛教研究』21, 1992, 113-132。

(8) 大正26, 396a5-398a26。

(9) 大正27, 589c17-591c19。

(10) これに関しては次の拙稿を参照されたい。平岡聡「『ディヴィヤ・アヴァダーナ』と根本説一切有部毘奈耶」『佛教文化研究』40, 1995, 9-22。

(11) 俱舍論では黑白業を言い表すのに vyatimīśra という語を使用していないので、用語の上からは俱舍論と Divy. の間に繋がりを見出すことが出来ない。Divy. では重要な意味を持つこの語が俱舍論の段階ではまだ十分に熟していなかったということであろうか。

(12) これに関してはすでに拙稿(『ディヴィヤ・アヴァダーナ』に見られる業の消滅)『佛教研究』21, 1992, 113-132)で述べたことがあるが、そこでは主人公の過去物語のみに焦点を絞ったものであった。本稿では、脇役を演じている者の過去物語も併せて紹介するつもりなので、重複を恐れず、Divy. に見られる総ての「黑白業」とその果報を纏めてみたい。

(13) 黒業と白業とは過去世においてなされるのが普通であるが、この説話では白業が過去世で、また黒業が現世で説かれており、他の説話とは少し違った形態をとっている。

(14) ここでも黒業と白業とが時を異にして説かれている。即ち、過去世で黒業が、現世で白業が説かれており、さらにこの白業の果報は来世で享受することになっている。

(15) 詳しくは次の拙稿を参照されたい。平岡聡「コーティーカルナの餓鬼界遍歴物語 — 『ディヴィヤ・アヴァダーナ』第1章和訳 —」『仏教大学仏教学会紀要』4, 1996, 43-93, esp. 57-62。

(16) 第7章「ナガラーヴァランビカー・アヴァダーナ」のブラセーナジット(白業→楽果)、第10章「メーンダカ・アヴァダーナ」のメーンダカ(白業→楽果)、第25章「章名なし」のサンガラクシタ(白業→楽果)、第35章「チューダーパクシャ・アヴァダーナ」のパンタカ(黒業→苦果)、第36章「マーコンディカ・アヴァダーナ」のアヌパマー(白業→楽果)、第37章「ルドラーヤナ・アヴァダーナ」のシカンディン(黒業→苦果)の過去物語では、「黒業→苦果」、或いは「白業

→楽果」のみが説かれているが、このうち主役を演じているのは、メーンダカ、サンガラクシタ、パンタカの三人だけであり、その他は脇役に過ぎない。

(17) 平川彰「大智度論における阿波陀那について」『平川彰著作集 第6巻 初期大乘と法華思想』東京：春秋社，1989，101-140，esp. 122.

An Aspect of Karma Emphasized in the *Divyāvadāna* and its Background

Satoshi Hiraoka

Jātaka, or stories about the former lives of the Buddha, is easy to define from its style and contents; however there are some problems regarding this genre of Buddhist literature when considering the generation of such stories. On the other hand, when considering the definition of Avadāna, no scholar has yet given a convincing definition for it. One reason is that narratives called Avadāna are actually diverse and lack consistency. Consequently, it is almost impossible to find a singular characteristic common to all the Avadānas. Any Buddhist text is intertwined with many elements, and one definition is not adequate to explain completely what type of text it actually is. However, there is one subject that can be found in many of the Avadāna texts. The topic is that of karmic causation which explains the present suffering (or pleasure) by the bad (or good) deed in the past, or which explains the suffering (or pleasure) in the future by the bad (or good) deed of the present.

Having undergone various changes through the long history of Indian Buddhism, the idea of karma has many aspects. Among them is the classification of karma into three types, namely black, white, and mixed karma of black and white. In this paper I will examine which karma among these three was emphasized in the *Divyāvadāna*, a collection of narrative literature of unknown date. Through this examination I determine that the emphasis in this particular text was put on the mixed karma.

It is quite obvious and understandable that bad (or good) karma causes suffering (or pleasure). Therefore the problem arises when one creates both bad as well as good karma, namely the mixed karma in his lifetime. The text explains that one must experience both suffering and pleasure as a result of bad and good karma. In other words, both cannot cancel each other out, or bad karma is not offset by good karma. It is surmised from this fact that the corruption of precepts might have become a subject of discussion in those days in India as has been already pointed out by Professor Hirakawa. Narratives dealing with the mixed karma would be compiled with the intention of putting a brake on moral backsliding, emphasizing that bad karma is never offset by good karma.